

帝国主義の侵略と金をつかまし全世界の帝国主義を打倒せよ！ スターリン主義との国際労派闘争を組織し、世界プロレタリア革命 世界プロ進 共産主義者同盟が世界第一党を国际社会中の目前に開拓せよ！

今号の内容

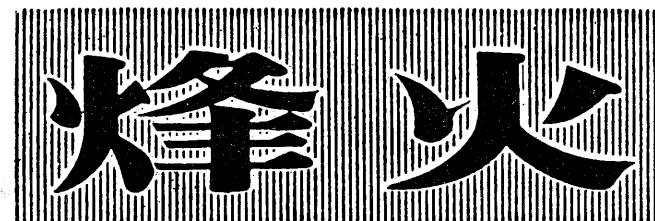
91年政治闘争基調

P2~11

■1・17緊急声明

P1

1991年
2月1日
第427号
編集発行人 高木一夫
一部 200円



ZOROSHI

共産主義者同盟（全国委員会）

■ 大阪戦旗社 大阪市北区本庄西2-8-19
明豊ビル401号 大労協内
TEL.(06)371-3706
○郵便振替 大阪3-63333 高木一夫
○銀行口座 第一勧銀 515-1058150 高木一夫

● 声明

共産主義者同盟（全国委員会）

一月一七日未明、米軍を中心とする多国籍軍は、イラクに対する軍事侵攻を開始した。それは帝国主義の侵略戦争であり、共産主義者同盟（全国委員会）は、この戦争に反対する全世界の人民のあらゆるたたかいを支持し、ともにこの戦争に反対する。

■ 帝国主義のアラブ侵略戦争に反対する！

この戦争は、第一にアメリカ、イギリス、フランス、日本をはじめとする帝国主義諸国の石油権益と政治的利益を防衛するために行われたアラブへの侵略戦争である。われわれは、アラブへの帝国主義諸国の侵略と分割支配の歴史を糾弾し、帝国主義のアラブ侵略戦争に反対する。

■ 日本帝国主義の侵略戦争への参戦に反対せよ！

日本はこの戦争への多国籍軍側に立った参戦国である。われわれは、日本政府による昨年来の多国籍軍への支援・自衛隊海外派兵策動、および現在の新たな参戦策動に対して、すべての日本人民が、半世紀前の侵略戦争に動員された歴史への真摯な反省をもって、この戦争に反対する世界の人民との連帯をかけてたちあがることを呼びかける。

■ アラブ被支配人民の侵略戦争に反対するたたかいを支持し、これに連帯する！

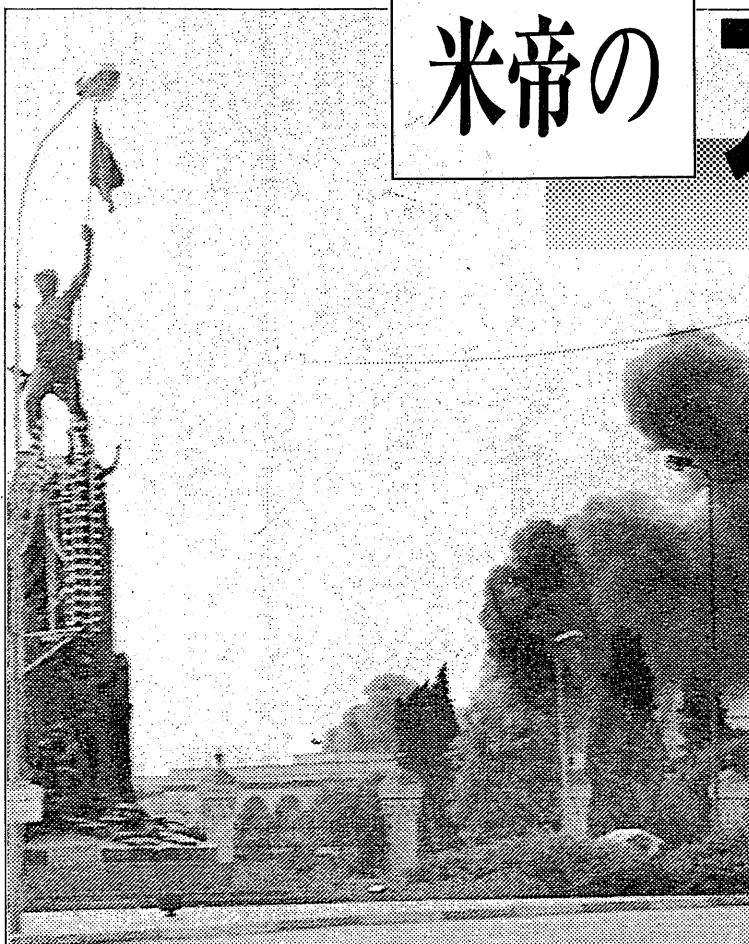
この戦争により、もっとも激しい悲惨をこうむるのは、戦争の結果がどうなろうとアラブ被支配人民であることは、はっきりしている。われわれは、帝国主義と反動的アラブ支配層による石油権益の独占を防衛するための侵略戦争に反対するアラブ被支配人民のたたかいを支持し、ともにこれに反対してたたかう。

■ アラブ被支配人民の反米・反帝国主義闘争を支持し、これに連帯する！

アラブ被支配人民は、帝国主義と反動的アラブ支配層の支配、および帝国主義のアラブへの支配・介入を保証するイスラエル国家の存在に反対して、独占支配のもとにある石油とその富をアラブ被支配人民の手に取り戻すためにたたかい続けてきた。この戦争の発端となつたイラクのクウェート侵攻・併合は、この歴史的なたたかいを、イラクの自國権益防衛のための戦争への支持へと収斂させてしまう反動的な軍事行動である。したがって、われわれは、イラクのクウェート侵攻・併合を支持しない。

同時に、われわれは、帝国主義の歴史的なアラブへの侵略と分割支配に反対するアラブ被支配人民の反米・反帝国主義をかけたたかいを断固として支持し、これに連帯してともに反帝国主義をかけてたたかう。

一九九一年一月一七日



黒煙をあげるバグダッドのイラク国防省（1月17日）▲

日帝の参戦を阻止せよ



中東に派遣される在米軍
(1月11日・嘉手納基地)

■ はじめに

一九九一年は、中東石油資源をめぐるすさまじい争いとともに幕を開けた。一月一七日未明、米帝はついにイラクへの軍事侵略を開始した。米帝をはじめとした帝国主義諸列強は、中東への侵略を共同で行いながら、今後の中東全域における支配権をめぐって激しい抗争をくり広げている。日本帝国主義も自衛隊の派兵や米帝などへの巨額の戦費援助を通じて、中東における支配権をめぐる争いの一角に食いこもうとしている。

ソ連・東欧におけるスターリン主義支配の破壊と崩壊という歴史的事態は、いま新たな世界支配の確立に向けた帝国主義ブルジョアジーの総攻撃と、これにともなった強盗的利権争いを生みだしつつある。帝国主義は一九一七年ロシア革命以降の社会主義革命運動の前進に対して、まぎれもなく歴史的守勢と対峙という一時代を強制されてきた。だが現在、ソ連・東欧をはじめとするスターリン主義支配の崩壊による既成社会主義諸国の解体と資本主義化という事態を機に、帝国主義は歴史的守勢から転じて、社会主義・共産主義の地上からの一掃と、新しい世界支配に向けた歴史的攻勢・全面的攻勢へとうつてている。

しかし、開始された帝国主義による新たな世界支配に向けた政治的攻勢は、決して彼らが夢見るような帝国主義の千年王国の到来をもたらさない。蓄積する貧困を背景に激化する第三世界の反帝・国主義闘争、むきだしの資本主義支配のもとにおかれることによつ

て新たに発生しつつある東欧諸国人民の不可避の反抗、帝国主義列強による新たな市場争奪戦と対立の激化、これら的一切が新たな歴史的局面下での国際階級闘争の前進をやがて呼び起こしていくであろう。

われわれは、このような九〇年代の世界を「スターリン主義の破産のもとでの帝国主義の総攻撃と、第三世界からの共産主義を求める決起の不可避の拡大」の一時代ととらえ、この時代を共産主義者として生きぬこうとする者にとって、帝国主義の攻勢から第三世界革命を防衛・発展させることを実践的任務とし、スターリン主義に代わる新たな国際共産主義運動の再建を切り開く「革命の持久・対峙戦略」を確立することが急務であることを訴えてきた。

そして今号では、このよう見地に立って、日本帝国主義が国際帝国主義への歴史的飛躍点にさしかかりつつあるこの一九九一年において、すべての先進的な労働者・市民・学生諸君が果たすべき政治的任務を提起するものである。圧倒的な守勢を強いられている日本階級闘争の現状を直視し、しかし決してこの現状に屈伏することなく運動と組織を防衛し、次の時代の流動にそなえて国際主義プロレタリアートを建設することに今日のわれわれの根幹的課題は存在する。その中心的任務は、不可避に生みだされ続けてくる第三世界革命運動に連帶し、日本帝国主義によってふりまかれる帝国主義的排外主義の影響から労働者人民をひき離し、日本帝国主義との正面戦へと首尾一貫して人民を領導する国際主義政治闘争を建設しきることにある。すべての先進的労働者は共産主義者同盟(全国委)とともに、全世界の革命的プロレタリア人民と結合し、断固として国際主義の大道を切り開いていくうではないか！

第三世界の革命に重きを置く 国際主義政治闘争の發展を

91年の政治闘争の基調

帝国主義は現在、ソ連・東欧のスターリン主義支配の崩壊という事態につけこみながら、新たな歴史的攻勢を開始しようとしている。それは地球上から社会主義・共産主義を一掃しようとする攻撃であり、また第三世界からの収奪のうえに成立する帝国主義の相対的安定を維持・防衛しようとするための死活をかけた攻撃である。

帝国主義の新しい攻勢の最大の柱は、帝国主義共通の戦略を対ソ対決から転換し、第三世界の反帝国主義闘争と社会主義革命運動を抑止し壊滅することに彼らの主力をふり向けていくことにある。帝国主義諸国は、第三世界の新植民地主義支配を安定させ、より強化していくことに全力をあげようとしている。

帝王主義諸国の相対的安定は、第三世界諸国からの富の収奪によって成立している。それは、第三世界諸国に飢餓と貧困を強いることによって成立してきたものであつた。帝王主義の新植民地主義支配を根拠として、第三世界諸国では反帝闘争と社会主義革命運動が不斷に発生してきた。帝王主義諸国にとって、ソ連・東欧などが脅威でなくなるとともに、最大の脅威は第三世界の反帝闘争と社会主義革命運動となつた。米帝のLIC（低强度紛争）戦略は、今日の帝王主義諸国との共通の戦略となつた。

八八年度米国防報告によつて初めて公式に定式化されたLIC戦略は、八九年、九〇年と、年をおうごとに重要な位置を与えられてきた。

九一年度の米国防報告は、「（第三世界の）低強度紛争は、アメリカの国益を脅かす可能性のもっとも高い形態であり続けるだろう」とし、また昨年三月に米政府が発表した「アメリカの国家安全保障戦略報告」は「われわれの軍事力を行使する必要が起る可能性には、ソ連は含

まれず、第三世界においてであろう」と明言している。米帝が恐れるのは、第三世界における反帝闘争と社会主義革命である。米帝のこのLIC戦略を推進していくために、日帝やEC諸帝国主義などが積極的な国際分担を行うという形で、新たな「冷戦後」の「国際秩序」の形成が進みつつある。その典型的な表れの一つは、日帝が最大の出資国となっているフィリピン・

新しい政治攻勢の始まり

帝国主義は現在、ソ連・東欧のスターリン主義支配の崩壊という事態につけこみながら、新たな歴史的攻勢を開始しようとしている。それは地球上から社会主義・共産主義を一掃しようとする攻撃であり、また第三世界からの収奪のうえに成立する帝国主義の相対的安定を維持・防衛しようとするための死活をかけた攻撃である。

平和貿易立国路線からの転換

第一章

態におとしこめている。一兆ドルをこえた第三世界諸国の累積債務は、債務の返済が不可能になる段階にまで進み、債務危機の慢性化は国際的な金融危機にまで発展しかねないという状態を生みだしている。

第一の要因は、第三世界における反帝闘争と革命運動の激化である。

帝王主義列強国の繁栄を支える第三世界諸国

では、人民の反乱が不可避に拡大し続ける。原因は明白である。圧倒的多数の人民が食うことになり、生きていけないからである。人民の反抗と共産主義運動の指導が結合しさえすれば、帝王主義のLIC戦略は、新植民地主義支配と地域紛争」制圧体制の形成がそれである。

帝王主義の新しい攻勢のいま一つの柱は、社会主義諸国との解体を促進し、従属資本主義国化をおし進めることにある。それは事の本質上、帝王主義列強による世界の再分割ともいえる規模と意味をもつた歴史的攻撃として開始されつある。

帝王主義の当面の目的は、ソ連の「民主化」を促進し、ソ連を帝王主義の国際支配秩序の一

角にしつかりと組みこんで資本主義への後退を決定づけること、また従属資本主義化を通じて、東欧諸国を新たな市場として獲得すること、そして最後に、中国あるいは他の社会主義諸国（キューバやベトナム、朝鮮民主主義人民共和国）が「民主化」の名をもつてソ連や東欧諸国その後を追わざるをえないように包囲と攻勢をかけていくことにある。

崩壊する帝の相対的安定

開始されたこのよき帝王主義の攻勢は、しばらくは表面上の成功をおさめ、帝王主義はひき続き相対的安定を保持するだろう。国际共産主義運動と国際階級闘争はかつてない守勢に立てられている。しかし、現在の相対的安定とそれを維持するための帝王主義の新たな攻勢は、それ自身の内部に崩壊の要因を内包している。内在する諸矛盾の爆発は、帝王主義の相対的安定期の崩壊と、新たな階級流動と階級闘争の激化へと転化する。

崩壊をひき起こす第一の要因は、帝王主義の現在の経済的繁栄の基礎である第三世界諸国における貧困の蓄積とその破滅的進行である。帝王主義の商品販売市場や資本投下市場たりえないほど決定的な貧困おいでいる。第三世界諸国は第三世界を膨大なサラ金地獄とでもいう状



深まる第三世界の貧困(最貧国の中の一つに数えられるネパールで)

子の赤字」を改善できず、他の帝国主義国から膨大な資金流入によって世界最大の債務国へと転落した。戦後の帝国主義支配秩序を支えてきた国際帝国主義の機軸国である米帝の経済危機によって、現在の帝国主義支配秩序はきわめて不安定な状態におかれ、ますますそのような状態は高まっていかざるをえないものである。

第四の要因は、東欧諸国での新たな激しい階級間矛盾と階級闘争の発生である。

は、帝国主義列強による新たな市場争奪戦の激化を招き、同時に東欧諸国人民がむきだしの資本主義的搾取と支配のもとにたきこまれることによって、東欧で新たな激しい階級間矛盾と階級闘争が発生していくことは不可避である。東欧諸国の人民が求めたものは、スターリン主義に支配された閉塞した社会からの脱却であり、より人間らしく生きられる豊かな社会であった。しかし、彼らの前に登場してきたのは、新たな資本主義的な貧困と抑圧であり、冷酷な資本主義の利潤追求の論理である。やがて東欧諸国の人々は、資本主義という新しい敵に対ししてたたかいの矛先を向けていくだろう。帝国主義は、東欧諸国を広大な市場として獲得することもに、同時に新たな敵＝プロレタリアートの大軍のたたかいと決起をも呼びさましていかざるをえないものである。

第五の要因は、帝国主義国間の力関係の大きな変化である。

戦後、帝国主義諸国の中で抜きんでた経済力で他を圧倒してきた米帝の経済的後退は、も

日帝の総合的反革命戦略

日帝は、きわめて乏しい資源と狭隘な国土しかもたない帝国主義であり、海外市場の絶えざる拡大によつてしか生きのびることのできない脆弱性をもつ帝国主義として成長してきた。

社会主義諸国の封じ込めと第三世界革命運動の鎮圧を米帝が一手にひき受けることを条件にして維持されてきたものであった。日帝は、ただひたすら国際競争力の強化と海外市場の拡大に専念することができた。その結果日帝は、急速に強力な経済力と軍事力を形成することに成功した。

日本のG.N.P.（国民総生産）は、いわゆる高度成長が破たんした直後の七五年の四九八五億ドルから、八七年段階で一兆九八三三億ドルへと四倍化した。この額はアメリカの約二分の一ではあるが、国民一人当たりの額ではアメリカを超えている。さらに日本のG.N.P.は、西独・英・仏の三カ国の合計に匹敵するものである。

末段階で六六三七億ドルに達し、世界最大の債務國に転落している。米帝の後退は決して一過性のものではない。アメリカ製品の国際的競争力の低下、国内産業の「空洞化」など、アメリカ経済の構造的な衰退を背景として巨額の財政赤字、貿易赤字、債務などは生みだされてきたのである。他方、米帝の後退のなかで、日帝が世界最大の債権国として台頭し、旧西独帝が独自の併合によってヨーロッパ最大の帝国主義になりました。戦後帝国主義支配秩序を支えた米帝の力量の大幅な低下は、日帝や独帝などの台頭と表裏一体のものとして進んでいく。加えて、東欧など社会主義諸国の解体が、帝国主義列強国間の市場争奪戦の一層の激化を招きつつある。それは東欧諸国との市場争奪、シベリア開発をめぐるヘゲモニー争い、中国市場への資本参入競争などとして現れ、帝国主義間の市場争奪戦は今後より一層大きくなつていくことが予想されている。

以上に示した諸要因は相互に深くからまりあつながら、帝国主義の相対的安定期の終焉と次の大規模な階級的流動を呼び起こしていくであろう。帝国主義の新たな攻勢に対峙しながら持久戦を組織し、不可避に訪れる帝国主義の相対的安定期の崩壊と次の階級的流動に備えていくことこそ、この一時代における革命的労働者の任務である。わが日本プロレタリアートは、にのべるような新興帝国主義として新たな総合的反革命戦略の推進を急ぐ日本帝国主義との闘争に全力をあげて立ちあがらなければならぬ

が可能であった。しかし、このような平和貿易に大きく変化しつつある。米帝を機軸とした戦後帝国主義支配体制が崩壊を開始し、帝国主義間抗争が激しくなり、保護貿易主義やプロック化の動きが強まってきた。

八〇年代後半から顕著となってきた帝国主義諸国の地域的結合の強化は、八九年のアメリカ・カナダ自由貿易協定の発効や、九二年のECC統合に向けた動きなどによって一層明確になってきた。これらは、帝国主義列強間による世界の再分割に向けた抗争が一層激化することを意味している。このようなかで日帝がこれまでの帝国主義的成長を維持していくためには、米帝が中南米への支配を不可欠としているように、日帝には、アジア・第三世界における独自の権益圏の形成が必要になってきた。こうして日帝は、東アジアを中心とした独自権益圏の確保、経済的には「アジア経済圏」の形成を展望しようとしている。日帝が描くアジア経済圏構想とは、日帝を頂点とし、日帝と従属性的に結合した韓国や台湾などのアジアNIES資本主義をその支配下に置き、さらにその下にASEAN諸国を組み込み、アジア人民からより大規模に搾取することによって、米帝やECC帝との帝国主義間抗争を推進する経済的拠点を築こうとするものである。

さらに日帝は、経済的にだけでなく、政治的にもアジア・第三世界支配を強化する必要に迫られてきた。日帝の経済的支配の強化が不可避にもたらすアジア・第三世界諸国の反日帝闘争の成長を抑止し鎮圧することが、日帝には不可欠となるからである。自己の経済的権益を確保していくためには、日帝はアジア・第三世界諸国人民の「第一の敵」として登場せざるを得ず、日帝はアジア・第三世界の革命運動を抑止し鎮圧していく直接の準備を開始していくことを不可欠の課題としている。こうして日帝は、平和貿易立国路線が可能であった国際的条件の崩壊とともに、次のような独自の政治・経済・軍事を貫く総合的な反革命戦略の確立と推進に向けて急ピッチで動き始めた。

日帝の総合的な反革命戦略の第一は、ODA（政府開発援助）をアジア・第三世界諸国に対する新植民地主義支配を強化していくための主要政策として位置づけて推進していくことであ

九〇年度版の「ODA白書」（外務省経済協力局発表）において田代は、「我が国の援助は、

我が國の対開発途上国外交の主要な構成部分で

あり、我が国の援助は我が国の大政と密接

不可分の関係にある」と、ODAが第三世界諸国に対する外交政策の主要な手段であるに切ら

国に文部省外交政策の主要な手段であると初めて公式に明言した。すでに日帝のODAは、八

九年実績で八九・六億ドルと、米帝を抜いて世界一となっている（米帝が七六・六億ドルで第

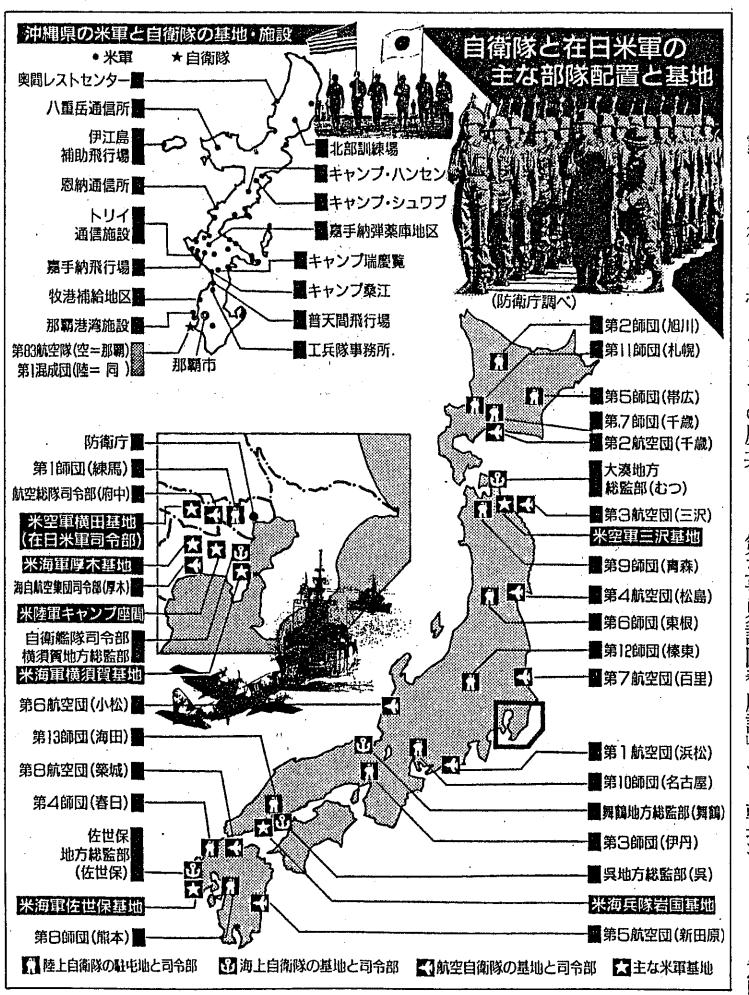
二位、仏帝七四・六億ドル、西独帝四九・五億ドルと続く）。その額は、たとえば第四位の西独帝の二倍近くにも達する莫大なものである。九一年度の日本のODA予算は八%増の伸び率を示し、総額において八八三一億円となつてゐる。

日帝のODAの大きな特徴の一つは、政府借款の割合が大きいことであり、八九年度実績ではそれは全体の四二・九%を占めている。かつて借款は「一頭の牛から一枚の皮をはきとるものだ」と批判された。借款を供与する側の国には元金と莫大な利子がころがりこむだけなく、借款とワ�セットになつた資材・機械・設備などの輸出を通じて二重の収奪が可能となるからである。ODA白書では政府借款の比率が高いことに日帝は反論し、「借款は返済義務を伴うことによって自助努力をより促進する面もある」などと開き直っている。事実は逆である。ODAを供与することによって、日帝はますますその国の経済を日帝に従属したものへと構造化するのである。さらに日帝のODAは、日帝にとって戦略的に重要とされる国に集中しており、なかでもアジア諸国が全体の六割を占めていることを指摘しておかねばならない。

したてODAは、日帝のアシア・第三世界支配のための有力な手段として、ますますフルに活用されようとしている。八九年以降実施されたフリーリン・アキノ政権への多国間援助計画などは、政治的意図をまるだしにしたものと最も顕著な例である。また、九一年度予算要求では東欧にODA全体の約二〇%の支出が予定されているが、日帝はODAを武器に、東欧をめぐる新たな市場争奪戦にも有利な位置を占めているのである。

日帝の反革命戦略の第二は、アジア・第三世界全域において政治的支配力を決定的に強めること、とりわけ「冷戦後」の「アジア新秩序」の形成の主導力を握ることにある。またそのために、政治的盟主としての地位を確保するための帝国主義的外交に本格的に踏みだしていくことがある。

日帝は、増大する経済的支配力に見合うだけの政治的影響力の獲得をめざし、とくにアジアにおいて日帝を盟主とする新たな帝国主義的秩序を形成するための主導権を握らうと必死になっている。そのもつとも顕著な例は、昨年のカンボジア内戦停戦交渉における新たなカンボジア政府の形成に向けた政治的介入の開始であつた。また、朝鮮民主主義人民共和国との国交回復に向けた動きに示されたように、日帝は、最後の「冷戦の残存地域」といわれる朝鮮半島の「緊張緩和」を促進することによって、「南北統一」とアジア新秩序の形成を目指す。それは、朝鮮民主主義人民共和国の「民主化」の促進と、最終的には「北の解体」をも展望するものである。さらに



侵略反革命戦争の出撃拠点と化す日本列島（朝日新聞より）▶

中国に対して日帝は、昨年のヒューストン・サミットにおいて対中経済制裁措置の解除を率先して要求するなど、他帝国主義に先がけて中国市場を確保しようとする野望をたくましくしている。

日帝は「アジア経済圏」の形成に見合った政治的支配権の確立を狙うとともに、中国や北朝鮮などの社会主義国を、日帝主導のアジアにおける新たな帝国主義支配秩序の枠内にとりこむいくことを展望しているのである。

反革命戦略の第三は、アジア・第三世界における反帝民族解放・社会主義革命の鎮圧に向けて日米安保を再編していくことであり、アジアの反共諸国を巻きこんだ反革命軍事同盟を形成していくことである。

帝の軍事力は米帝の補完力として位置づけられ
てきた。しかし、いまソ連の脅威は消滅し、日
米帝国主義にとって第三世界の反帝民族解放
社会主義革命運動こそが最大の脅威となつた。
同時に、米帝は新たな世界支配の構築のために、
帝国主義陣営での自己の力量の後退という事態

に強制されつつ、同盟国への役割分担を積極的な戦略として推進しようとしている。日帝もまた米帝の世界戦略を政治・経済・軍事全般にわたりて補完し、自己のアジア・第三世界支配強化のために、日米安保を世界各地の「地域紛争」

に介入する反革命軍事同盟へと積極的に再編・転換していくとしている。アジアにおいては、日帝は、日・米・韓のみならず、タイやフィリピンなどの反共政権をも含むアジア全域での反革命軍事同盟の形成へと向かっている。昨年秋、

タイのチャチャイ首相は、海上自衛隊とタイ海軍との合同軍事演習を石川防衛庁長官に提案した。こうした動きは今後、日帝とアジアの反共

A map of northern Kyushu, Japan, showing the locations of various military installations. Labels on the left side point to specific sites: '米軍' (US Army) points to '那覇市' (Naha City); '自衛隊' (Self-Defense Forces) points to 'リイ施設' (Ryūi Facility); '信所' (Post Office) points to '江島行場' (Kashima Ryōgei); '行場' (Ryōgei) points to '地区' (District); '施設' (Facility) points to '那覇' (Naha); and '(同)' (Same) points to '那覇市' (Naha City). The map also shows the coastline and major islands.

沖縄県の
奥間レストセン
八重岳通
伊
補助飛
恩納通
ト
通信
嘉手納飛
牧港捕縄
那霸港湾
第83航空隊(陸=)
第1混成団(陸=)
防

政権双方の側から加速されるであろう。八九年に行われたPACEX（太平洋演習）は、米帝とアジア各国との二国間軍事同盟にもとづいた軍事演習として行われつゝも、実質上は、アジア全域での合同軍事演習の地ならしを狙うもの

であった。日帝は、アジア全域での反革命軍事同盟の形成をはかりながら、その要として日帝軍事力の飛躍的増強を進めようとしている。

反革命戦略の第四は、アジア・第三世界における反乱や革命鎮圧のために、独自の軍事出動・海軍兵士行進曲

九〇年度防衛白書は、「東西関係は冷戦の発想を越えて本格的な対話・協調の時代に移行しつつある」との精神で、米・ソ連・西欧・東欧の軍事力の強化と整備を進めていくことにある。

「である」との情勢説明を示し、八〇年以降の軍事力増強の一貫した根拠であった「ソ連の脅威」論を初めて公式にとりさげた。代わってうちだされつつあるのが、「力の空白」という論理である。一方日本等は、「ソ連の脅威」を

理である。防衛白書はいう。——我が國がこのよう
な防衛力を保有していることが、我が国周辺
の国際政治の安定の維持に貢献することもなつ
て、「我が国に対する軍事的脅威に直接対
抗することをめざすよりも、自ら力の空白となつ
て、この地域の不安定要因とならないようになつ

べきである」と。では、この地域の不安定要因とは何か。それは「ソ連の脅威」ではない。防衛白書ははっきりのべている。すなわち、それは「米ソ間の緊張緩和を背景として、いわゆる第三世界における紛争が生起しやすい状況が生

じる」ということであり、中東を含む第三世界が「石油その他の原材料の不可欠な供給地であるとともに、重要な海上交通路を抱えている」ために、「日本を初めとする西側諸国の安定と繁栄に対し直接又は間接的に影響を及ぼす」と。

日帝はその軍事力の必要性の根拠として、これまでの「ソ連脅威論」から、明確に「アジア・第三世界諸国脅威論」へと転換することを意図

米空軍三澤基地司令部
 ■第9師団(青)
 ■第4航空団(東)
 ■第8師団(東)
 ■第12師団(榛)
 ■第7航空団(西)
 ■第1航空団(西)
 ■第10師団(名)
 ■舞鶴地方総監部
 ■第3師団(伊)
 ■吳地方総監部
 ■米海兵隊岩国基地
 ■第5航空団(西)
 基地と司令部 ■主な米軍

本列島（朝日新聞より）▶

不空真嶋侯
（在日米軍司令官）

米海軍厚木
海自航空聯隊司令官

米陸軍キャット
自衛隊隊長
横須賀地方總監

米海軍権利回
第6航空団（回）

第13師團（回）

第8航空団（回）

第4師團（回）
佐世保
地方總監
(佐世保)

米海軍佐世保
回（回）

第6師團（回）

陸上自衛隊

している。こうした方向にそつて次期防衛力整備計画（九一年から五カ年の計画）では、これまでの軍備の量的拡大と正面装備の増強という

方向から、その質的転換のための準備を進めようとしているのである。

新たな政治的攻勢の第四は、労働運動の帝国主義的再編と運動した本格的な政党再編を、階級支配のより一層の安定のために進めていくことにある。

新たな政治的攻勢の第四は、労働運動の帝国主義的再編と運動した本格的な政党再編を、階級支配のより一層の安定のために進めていくことにある。

侵略戦争への出動ねらう日帝

日帝は、「自」のアジア・第三世界の支配の強化にともない、「国際国家日本」「経済力にみ

あつた国際的責任」等々を掲げ、これまでの平和貿易立国路線からの転換を、公然と人民に問いただし始めた。昨秋の自衛隊海外派兵法案＝国連平和協力法案の国会上程は、その号砲に他ならなかつた。

日帝はこうして、国内における新たな政治的攻勢を開始してきた。それは、日帝が今日の相対的安定を維持し、次の新たな時代的要請に備えるための、政治・経済・軍事の全領域にまたがる一時代にわたる政治的攻勢である。日帝は、これまでの平和貿易立国路線に対応した国内体制全般からの転換と再編に向けた政治的攻勢を強めようとしている。

全面的な国内支配の再編

新たな政治的攻勢の第一は、自衛隊海外派兵の直接的準備を公然と開始しながら、「わが国はどこに進むべきか」という、すなわち平和貿易の側から攻勢的に組織していくことにある。

昨秋の国連平和協力法案の国会上程は、その最初の攻撃であった。ブルジョアジーは、自衛隊派兵それ自体の是非を真正面から人民に問い合わせながら、軍事出動への国民的な認知をとりつけようとした。国連平和協力法案はいったんは廃案となつた。しかし廃案と同時に、民社党、公明党との間で「国際平和協力に関する合意見書」をとりかわし、「国連待機軍」や「国連平和維持軍」などの準軍事的組織の創設などによる新たな派兵準備に踏みだしたのである。

ブルジョアジーは、戦後一貫してタブー視されてきた自衛隊派兵問題を、現実的な国民的選択レベルの論争へとおし上げることによって、海外派兵に向けた大きな条件を獲得した。ブルジョアジーは、自衛隊派兵に対する人民の側からの抵抗の度合いを見定めながら、政治的攻勢をさらに強化しようとしている。

新たな政治的攻勢の第二は、海外派兵を可能とする国内の法制度・税制度・政治制度の抜本

的再編を進めることにある。

日帝には、平和貿易立国路線に対応した憲法を頂点とする戦後の法的制約や政治的枠組みを大幅に再編していくことが、いま切実に要求され始めている。昨秋の自衛隊派兵を狙う攻撃のなかで、ブルジョアジーと政府・自民党は、自衛隊法改悪策動や有事立法策動にとどまらず、第九条の放棄をはじめとする憲法そのものの抜本的改悪さえ猛然と主張した。ブルジョアジーは海外派兵のための法制度の改悪を、一層強力を要求し始めている。その中心は憲法改悪を含む有事即応型の法制度の確立であり、軍事出動を可能とする法的根拠の確立である。そのためには彼らは、国連平和協力法に代わる新たな派兵法案を作成し成立させることを狙っている。

また、軍事財源確保のために導入された消費税の既成事実化などの税制改悪や、小政党のしめだしを狙った衆院への比例代表制の導入、「革命の予防に寄与する」（八三年自民党政党法垂綱）という政党法の制定策動などをとおした政党再編と革命組織への弾圧の強化が進められようとしている。

新たな政治的攻勢の第三は、排外主義の煽動を中心とするイデオロギー攻撃の強化である。

日帝はこのかん、天皇の代替わりなどをとおして新たな排外主義攻撃を強めようとしてきた。

天皇ヒロヒトの死を利用して、第二次帝國主義戦争における日帝の侵略とアジア人民虐殺の歴史の清算が策謀され、昨年五月の韓国大統領・盧泰愚来日時には新天皇アキヒトと自民党政権による「加害者としての謝罪」が演出された。また一月には「新天皇即位式一大嘗祭」が首都を厳戒体制下において強行されたが、これに合わせてヒロヒトの「獨白録」なるものが公表され、「平和主義者ヒロヒト」なるキャンペーンも張られた。こうして一連の儀式や攻撃をして強化された天皇制は、日本帝国主義の侵略と蛮行の象徴といふ血ぬられたイメージの払拭をはかりながら、今後の新たな日帝のアジア・第二世界支配と国内階級支配に対応するものへと変化させられようとしている。日帝は本年、新天皇アキヒトのASEAN歴訪や訪韓を策動している。

また日帝は、天皇制イデオロギーを強化しながら、他方で中東危機を利用しての「日本の権

益を守れ」「日本人の生命を守れ」という排外主義キャンペーン、あるいは官民あげての「北方四島」返還運動や「尖閣列島（魚釣島）」略奪のための帝国主義的領土要求運動などを、より一層強化していくこうとしているのである。

これら排外主義の煽動を中心とするイデオロギー攻撃の総体は、からまり合いながら日帝の軍事出動を可能とする国民意識の形成の一とに向けて強化されようとしているのである。

新たな政治的攻勢の第四は、労働運動の帝国主義的再編と運動した本格的な政党再編を、階級支配のより一層の安定のために進めていくことにある。

今日、日帝の莫大な超過利潤を背景にして、上層労働者が膨大な層として生みだされている。日帝はこれに対応して、上層労働者の利益を代表する「連合」を発足させ、日本労働運動を帝國主義的労働運動のもとに再編し、階級支配の安定をはかるとしてきた。また「連合」発足と連動させながら、社会党の一層の右転落を条件に、いわゆる中道野党を含めた政党再編を貫して策謀してきた。それは保守二大政党制による階級支配の新たな安定的構造の確立を狙うものである。衆院における比例代表制導入なども、このよう二大政党制の策動と結びつくものである。そして二大政党制策動を基盤に、一方では、破防法などによって革命的前衛党の根絶を狙い、他方では、政党法などによって議会内左翼としての日共のおさえ込みをはかり、労働者大衆の不満や反抗をブルジョア階級支配に決して向かわないように無害化する政治構造を確立していくこうとしているのである。

意識的階級形成の重要性

これまでの平和貿易立国路線に対応した国内体制全般からの転換と再編に向けた一時代にわたる日帝の政治的攻勢が開始されるなかで、わが国の労働者人民は政治的に大きな流動を始めている。しかしそれは決して現在の日帝の侵略反革命出動への攻勢に正面対峙していくような流動の開始ではない。昨年の国連平和協力法案を廃案に追いこんだわが国労働者人民の多くの意識は、現在の日本の繁栄とその基礎になつてゐる日本の海外権益は維持したいが、それを武力で防衛するための海外派兵には反対するという内容のものであった。この意識は、日帝の平和貿易立国路線からの転換過程に対応した過渡期の意識である。日帝は、積極的・攻勢的に自衛隊海外派兵をめぐる国民的論戦を組織することをとおして、この過渡期の意識を、「帝国主義的権益の平和的防衛」という今日の自然発生的状態から、「帝国主義的権益の軍事的防衛」の承認・擁護へと成長・転化させていくこうとし

て
い
る。

日本は帝國主義としての急速な成長とともに、わが国の労働者人民の内部には「生活保守主義」が蔓延するようになった。それは、日帝の膨大な超過利潤を経済的根拠にしたものであり、一過性ではあれ国民の大半が「明日食うことなく困らない」という状況を背景にして生みだされ、強まってきたものである。それは、帝国主義の寄生性と腐朽性の労働者人民への投影である。労働者人民の多くは、日本の「繁栄」の根拠である日帝の第三世界人民に対する搾取と抑圧、そしてその結果もたらされた第三世界の人民の困窮や悲惨を見ることができず、日帝による第三世界人民への支配と抑圧に加担させられている。帝国主義の寄生性と腐朽性が労働者人民にもたらしているこの生活保守主義は、帝国主義的排外主義の新たな基盤を形成しつつある。

また生活保守主義の広範な浸透を背景にして、自己の所属する階級が何であるのかについての意識、「労働者意識」が日本の労働者階級から急速に薄れていくという事態が生みだされている。産業構造の急速で大規模な転換は、日々の労働のなかで資本と賃労働の矛盾を意識せず、形成しつつある。

いま日本労働者人民はいやおうなく日帝ブルジョアジーの利益に立つか、アジア反帝民族解放闘争の利益に立つかを、鮮明に問われる時代に直面している。だが、労働者階級のたたかい内部に送り込まれたブルジョアジーの分遣隊である社会民主主義、改良主義、経済主義などのあらゆる部分が、帝国主義的排外主義に唱和・屈伏し、ブルジョアジーの側に立って労働者人民をアジア反帝民族解放・社会主義革命との結合の放棄・敵対へとかり立てんとしている。これらへの批判を鮮明にし、労働者人民をこれから分岐させていくことは、さわめて重要な課題である。

第二章

排外主義に屈服する既成政党

それは、帝国主義の寄生性と腐朽性の労働者人への投影である。労働者人民の多くは、日本の「繁栄」の根柢である日帝の第三世界人民に対する搾取と抑圧、そしてその結果もたらされた第三世界の人民の困窮や悲惨を見ることができず、日帝による第三世界人民への支配と抑圧に加担させられている。帝国主義の寄生性と腐朽性が労働者人民にもたらしているこの生活保守主義は、帝国主義的排外主義の新たな基盤を形成しつつある。

また生活保守主義の広範な浸透を背景にして、自己の所属する階級が何であるのかについての意識、「労働者意識」が日本の労働者階級から急速に薄れていくという事態が生みだされていく。産業構造の急速で大規模な転換は、日々の労働のなかで資本と労働の矛盾を意識せず、

を増大させ、労働者階層に拍車をかけた。

日本のようなならん熱した帝国主義においては、ただ国際主義的な立場に立った共産主義者は、労働者人民に対する意識的働きかけだけが、彼らをプロレタリア階級として形成できる。第三世界の反帝民族解放－社会主義革命の利益を擁護し、第三世界人民の帝国主義に対する激しい批判に応え、労働者人民をプロレタリア階級＝国際主義プロレタリアートとして形成していくことのなかにのみ、日本階級闘争の再建を可能とする唯一の道が存在するのである。

いも日本本位の人臣にしてやむを得なく日本帝のハジヨアジーの利益に立つか、アジア反帝民族解放闘争の利益に立つかを、鮮明に問われる時代に直面している。だが、労働者階級のたかい内部に送り込まれたブルジョアジーの分遣隊である社会民主主義、改良主義、経済主義などのあらゆる部分が、帝国主義的排外主義に唱和・屈伏し、ブルジョアジーの側に立つて労働者人民をアジア反帝民族解放－社会主義革命との結合の放棄・敵対へとかり立てんとしている。これらへの批判を鮮明にし、労働者人民をこれからから分離させていくことは、さわめて重要な課題である。

日帝の擁護に走る社会党

いま社会民主主義はブルジョアジーの補完物として、いよいよその本領を發揮しようとしている。ソ連共産党・ゴルバチョフによる社会民主主義再評価の発言やイタリア共産党の社民路線への転換など、スターリン型社会主義路線の右翼的清算がこの動きに拍車をかけている。八

「社會民主主義は、帝國主義本国の労働貴族やさざまな「生活保守層」に基盤を置き、帝國のもとに労働者人民を組織するための補完物として今日まで生きのびてきた。彼らはかつて第一次・第二次大戦という帝國主義戦争の時代には、帝國主義的権益の擁護のために帝國主義戦争を贊美し、労働者人民をこの戦争にかり立てるために「祖国擁護」を吹聴してまわった。また戦後においても彼らは、帝國主義の新植民地強力に擁護し始めた。

社会党には、彼らの従来の「チブル和平主義」的な「護憲・反安保・非武装中立路線」すら足りなくなっている。「安保の積極的活用」は、「条約第一條（低開発地帯とりわけ東南アジア開発における日米協力）の活用・拡大を中軸とする」とあるように、国際帝国主義として飛躍しようとする日帝の意向に沿って、アジア・第三世界への新植民地主義を支える日米帝国主義支配強化を尻おしするものに他ならない。ただ社会党は、これを従来通りの平和貿易立国路線

味はない」と、「安保の積極的活用」（山口書記長談話「安保改定条約三十年を迎えて」）を昨年から主張し始めた。社会党がたとえ書記長談話という形とはいえ、日米安保条約を「民主主義と自由を守る信念が表明されたもの」と賛美し、「日米間の相互信頼の上に築かれた経済協力関係が果たした役割は大きい」と総括づけるに至ったのは、何ら驚くにあたらない。それは、アジア・第三世界に対する日帝の新植民地主義支配を擁護するために、日米安保同盟の基本性格である侵略反革命軍事同盟としての役割を積極的に肯定し始めようとする反動的なもくろみなのである。

を増大させ、労働者階級の脱階級化状況に一層拍車をかけた。

支配を擁護し、帝国主義の侵略反革命軍事同盟を支持して、これを「世界秩序安定のための要因」（フランス社会党）であると人民をあざむき、ブルジョアジーへの積極的協力を行ってきた。共産主義運動に真向から敵対し、帝国主義の利益を擁護する社民は、帝国主義的権益の保持のために他国労働者人民と争うことを本質としている。かつてフランスやベルギーなどでは社民は、反帝民族解放闘争に対する侵略反革命戦争出撃の直接の加担者としてたちあらわれた。

の保守に立って実現することを主張し、「安保の軍事協力・強化面を徐々に縮小し…」「総合的な条約として現実的に運用する…」などの口当りのよい言葉で労働者人民をあざむいているのである。昨秋の社会党による国連平和協力法反対運動も、この立場と矛盾するものではない。彼らは、「武装自衛隊の海外出兵」という自民党の露骨な侵略反革命戦争出動の踏みだしに対し、従来通りのやり方など異なることを要求したにすぎない。

社会党の路線は、日帝の経済権益がアジア反帝民族解放・社会主義革命によって脅かされるとき、侵略反革命戦争による権益の実力防衛に諸手をあげて合流するものに他ならない。

日帝の存在否定する日共

このような社会党を日本共産党は激しく批判し、みずからを日本における唯一の社会主義をめざす前衛党と称し、諸政党の翼賛化に抗する唯一の野党であると主張してきた。だが、このような主張にもかかわらず、日共は対米従属論を基本路線とし続けることによって日帝免罪・擁護を深め、帝国主義的排外主義へのとめどない屈伏の道を進んでいく。

昨年の第一回党大会の「日本の社会の現在と展望」のなかで、日共はより一層の体制内化と排外主義への屈伏をさらけだした。このなかで日共は彼らのめざすものを、「社会主義の日本ではなく、国民に背をむけた自民党政治を終わりにして、国民が眞に主人公となり、資本主義の枠内でも国民が平和でより豊かで自由な生活をおくる日本である」と主張している。それは具体的には、「①日米軍事同盟をやめ、核兵器も、外国の戦争にまきこまれる心配もない日本②世界第一位の経済力を、軍備拡大のためや大企業・財界優先でなく、国民のために生かす真に豊かな日本③民主主義が開花し、国民が名実ともに『国の主人公』となる日本」を、内容とするものである。

この根本的誤りの第一は、現在の帝国主義の世界支配再編のもとで日帝が占める位置をまったく誤ってとらえている点にある。日共は、日本が現在、国際機軸帝国主義への飛躍の途上にあることを、労働者人民の目からおおいからず。そして、日米安保同盟が「『日本の防衛』にとって無縁のもの」であり、「アメリカの世界戦略に『軍事・政治・経済』全領域を組み込む、米日独立資本の合作による日本国民に対する未曾有の大収奪と抑圧の体制づくり」であると主張する。そして安保条約さえなくなれば、「国民は軍拵の重荷から解放され、経済面での内政干渉から解放され日本経済の自立的発展の道が開かれる」と結論づける。

日帝打倒放棄した共労党

一九五〇年代末に社共と決別し、階級闘争の戦術的前衛に立ってきた新左翼潮流は、八〇年代を通して、マルクス・レーニン主義を放棄し帝国主義社民の庇護のもとに入ろうとする右翼日和見主義と、戦術的前衛の保持に自己の前衛性を見出し続けようとする急進民主主義とに分離してきた。

右翼日和見主義は、現存社会主義と革命運動へのプチブル的絶望、マルクス・レーニン主義の放棄によって階級的立場を喪失し、革命的政治実践に対する阻害物としての役割を強めていた。その代表的組織である共労党の、「マルクス・レーニン主義は破産した。社会民主主義を見直し社民の限界を突破して新たな社会主義の再生を」というような主張などは、社民の庇護のもとに入ろうとする彼らの願望を如実に示す

しかし日本資本主義は、いまや経済的には米帝に次ぐ実力をもち、アジア諸国に対する新植民地主義支配をますます強め、この権益を守るために世界第三位の膨大な軍事費を使って軍事大國の道を歩み続けている。これを帝国主義として認めないと、日帝は自己の権益の防衛のために日米安保同盟を必要としていることを認めないことは、実践的には、日帝によるアジア・第三世界への新植民地主義支配や侵略反革命戦争に対する闘争から日本労働者人民を遠ざけ、これに屈伏させるものに他ならない。

第一の誤りは、帝国主義本邦主義への解体であり、帝国主義的排外主義への屈伏である。

「世界第二位の経済力」は、日共のいう大企業本位の国民生活の圧迫・収奪のみによってもたらされたものではなく、第三世界、とりわけアジアの国々からの過酷な植民地的収奪によって築かれたものである。援助の名を借りた過剰商品・過剰資本の輸出を通じた経済的従属・債務奴隸化を押し進めながら、日帝は新植民地主義支配下諸国の原材料・資源を略奪し、労働者人民を低賃金と過酷な労働条件のもとでこき使いつ、膨大な超過利潤を吸い上げてきた。「世界第二位の経済力」とは、このような収奪の結果なのである。日共が問題としているのは、この超過利潤の分け前である。

われわれは、労働者人民の経済要求・改良要求を決して否定するものではない。しかし、それらは階級闘争の発展の物質的な条件の拡大という目的にそってたたかわれることなしには、労働者人民を眠り込ませることに結果する。とりわけ、らん然とした帝国主義国においては、労働者人民の経済要求・改良要求は、帝国主義的権益の防衛を唱える帝国主義的排外主義との鮮明な分岐をもつて組織されなければならない。

日共は、このかんの日帝による有事立法・改憲・政党法などの攻撃、また天皇(制)イデオロギー攻撃などを、「主權在民の侵犯」ととらえ、いま日本労働者人民に侵略反革命戦争のための歴史的な動員攻撃が開始されようとしていることを隠蔽する。そして彼らは資本主義下の民主主義=ブルジョア民主主義を防衛し、発展させることが必要だと主張している。しかし、日共が「主權在民」の理念のために守り発展せるべきであるとしているブルジョア民主主義とは、プロレタリアートが血を流してたたかい、獲得してきたものではあるが、ブルジョアジーがプロレタリアートを懷柔し、ブルジョアジーの目的実現のためにプロレタリアートをひき入れていくための譲歩であり、手段である。日共はブルジョア民主主義をプロレタリアートのたたかう武器として活用するのではなく、それ自身の実現、「國民主權の確立」を自己目的化することによって労働者人民を階級闘争から遠ざけるという誤りをおかしているのである。

帝国主義社民へと転落する社会党を激しく批判しながらも、眞に國際主義的な立場に立てないがゆえに日共は、帝国主義的排外主義に屈伏し、開始された侵略反革命戦動員の歴史的攻撃とたたかえないものである。

ものである。すでに政治党派としては解体した彼らは帝国主義本邦市民に依拠したサークル組織にすぎないが、彼らの根本的犯罪性は、帝国主義や社民が組織できない部分に、反マルクス・レーニン主義の立場から忍び寄り、帝国主義に汚染していくことにある。

右翼日和見主義・共労党の犯罪性は次の点にある。彼らの犯罪性の第一は、「日本資本主義の根本的批判」を日本帝国主義への批判として立てることを拒否し、「解放社会像作り」なるプチブル的体制改良運動を恥知らずにも提起していることにある。

今日の日本資本主義への批判を、アジア・第三世界に対する新植民地主義支配への批判を不可欠とした日本帝国主義批判として立てる。アジア・第三世界の反帝民族解放・社会主義革命と結合した日帝との正面戦として立てるとは、日帝本国人の根本的責務である。すでにアジア・第三世界からは、「第一の敵」として登場しつつある日本帝国主義への激しい批判が

開始されている。共労党は帝国主義本国人民のプロレタリア的責務を放棄し、「單なる批判・反対では意味がない」とこれに睡をはきかけ、日本労働者人民の実践的任務を「現実的なオルタナティブ（対案）」なる帝国主義本国だけで可能となるプチブル的体制改良要求へとすり替える。

「解放社会像」として彼らが主張するのは、たとえば労働運動の分野においては「もう一つの働き方…、自由で平等な職場、『ゆとり』ある労働、社会的に有用な労働の復権の実践的な追求」であり、これを実現する組織としての「労働者生産共同組合」である。これらは帝国主義国で社民が主張する、第三世界への過酷な植民地的収奪を土台にした「福祉国家」と何ら変わりのないものである。共労党は、これを「社会主義にかわる新しいオルタナティブ運動」などと吹聴し、社民には手が届かない部分をプチブル的体制改良運動へと引きこもうとするのである。

第二は、開始されようとする日本帝国主義の侵略反革命戦争出動の歴史的攻撃を隠蔽し、これとの正面対決をアジア・第三世界の反帝民族解放・社会主義革命と結合して準備することを拒否し、「アジアの小国日本をめざそう」なるプチブル平和主義をまきちらすことである。

共労党は、日帝の侵略反革命戦争出動との國際主義的責務をかけた対決を準備しようとする革命的政治実践に対し、「問われているのは…アジア第三世界への政治的・軍事的・経済的支持の総体を撃つことである」と説教する。しかしそれは決してアジア・第三世界の反帝民族解放・社会主義革命の利益に立つことを呼びかけるものではない。それは逆に、アジア・第三世界労働者人民の要求に背を向け、日帝の歴史的攻撃との正面からのたたかいを回避し、帝国主義本国で不斷に発生するプチブル平和主義的な願望や改良運動に大義名分を与える、意味付与するためのものであることは、彼らの実践方針が雄弁に物語っている。たとえば日米安保同盟に対する闘争を共労党は、「『豊かな日本』『政治大國化』…のありようを変え、オルタナティブな『アジアの小国日本』をめざすもの」、具体的には「地域での反基地闘争やODAへの闘い、緑と自治をまもるたたかい」と主張する。これらは、安保同盟という日米帝の侵略反革命軍事同盟の脅威に日々さらされつつ、帝国主義の新植民地主義支配を打倒すべく生死をかけてたたかう反帝民族解放・社会主義革命の苦闘への連帯の放棄である。すなわちそれは、日本労働者人民の排外主義への屈伏のために日帝との正面戦という革命的実践の組織化が困難な局面にあることに尻ごみし、日帝を打倒することなく「アジアの小国日本」をめざすなどというプチブル平和主義的願望や個別改良要求の運動に逃げこもうとするもの以外ではない。

新左翼内部からなだれうつ帝国主義本国主義への屈伏が開始されるなかで、急進民主主義・革共同中核派は、これを激しく批判しながらもこれへの戦術的分歧しか提起しえないのである。それは彼らが自らをマルクス・レーニン主義者と規定しながらも、いまだ反スタ・トロッキズムの弱点を突破しないことの結果に他ならない。

中核派は、侵略反革命戦争出動に向けた日帝の歴史的攻勢が開始されるなかで、「蜂起戦体制の確立」を声高に叫んでいた。彼らは現在の労働者人民内部から発生する抵抗戦や戦後政治体制の保守を基盤とした危機意識に着目し、日本国内の戦闘性をもつた諸民主主義闘争を徹底して急進化していけば「下からの内乱」を遂行するプロレタリアートが形成されると考えていい。しかしそれは、現在の階級闘争の持久戦的な局面をとらえられずに、ただちの内戦への攻勢を叫び、帝国主義の政策的諸結果への戦術的前衛の保持に自らの前衛性を見出し続けよう

■ 第四章
先進的労働者・学生に訴える

われわれからの訴えに真摯に耳を傾けるすべての友人たち！先進的プロレタリア自身がひき受けるべき九一年の政治的任務を、以下五点として提起する。

■ ■ ■ ■ ■

国際主義政治闘争の発展

昨年秋の自衛隊海外派兵をめぐる一連のブルジョアジーの攻撃は、日本の労働者人民を侵略反革命戦争に直接的に組織しようとする一時代を費やす敵の攻勢の開始を意味している。国連平和協力法と自衛隊の海外派兵をめぐる全国民的ともいえる昨秋の流動は、日本帝国主義の危機的到来に備える共産主義者の意識的活動を断続的に重要であることをさし示した。危機の到来に備える共産主義者の意識的活動とは、今日、国際主義政治闘争を主戦術とした国際主義プロレタリアートの建設を根幹とするものである。

国際主義プロレタリアートの建設は、国際主義政治闘争の重層的な組織化によってしか実現されない。われわれの任務は九一年を通じて、国際主義政治闘争の以下に述べる二重の発展をめざしていくことにある。

その第一は、アジア・第三世界人民と結合して日本の再軍備・再侵略と対決していく国際主義政治闘争に、より多くの良心的市民や労働者・

とするものであり、国際主義プロレタリアート建設の放棄に他ならない。今日、日本階級闘争は日本一国の規模で自己完結的にとらえることがいかなれる意味でも不可能になるような時代に突入しており、プロレタリアートの階級形成は決して日本本国の自然発生性の延長上には実現しない。アジア・第三世界の反帝民族解放・社会主義革命の利益にしかりと立脚した革命的前衛党の意識的働きだけが、国際主義プロレタリアートとして労働者を階級形成することができるのである。中核派の弱点は、労働者人民の決起を国際主義政治闘争建設に結実させるのではなく、帝国主義の政策的諸結果への戦術的急進化に露散することに結果するのである。いずれにせよ右翼日和見主義も急進民主主義も、この大きな時代的転換点のふるいにかけられていかざるをえない。たゞ真の国際主義に立つものだけが、次に始まる日帝の侵略反革命戦争出動と労働者人民との歴史的大会戦を、勝利へと導導することができるるのである。

日本人民にとって自國支配層が自衛隊派兵によって守ろうとするものが第三世界における日本帝国主義の権益以外の何ものでもないことを徹底して暴露すること。さらに、「平和」への希求は決して帝國主義国内の城内平和を求める要求にとどまつてはならず、帝国主義そのものの世界的支配を根絶し、社会主義革命へと前進しようとする第三世界人民の反帝民族解放闘争への共感と連帯を、自己の後に続く労働者人民に確固として確信させていくこと。このような任務をもった活動家の政治闘争が、国際主義政治闘争の中核に建設されなければならない。

国際主義政治闘争の二重の発展を実現していくために先進的労働者は、いまだ鮮明な政治意識をもたないままに置かれているより多くの労働者人民を、帝国主義的排外主義の側に追いやらなければならぬために、国際主義政治闘争に接近させていくためのさまざまな政治運動・社会運動を領導していくという活動を、意識的に強化しなくてはならない。帝国主義支配によって作り出された第三世界人民の困窮や、そこに住む人々が生き続けることができないほどの自然破壊・資源収奪、人間そのものの奴隸化の状況への人間的関心や連帯の感情を、断固として帝国主義・資本主義への批判に結合させ、このような状態を強要するものへの根本的闘争に連帯と組織していく活動が問われている。それは、帝国主義本国特有の超階級的環境保護運動やブルジョア的慈善運動にわが国人民をひき渡すことなく、第三世界が直面する矛盾の根本的解決をめざす第三世界人民自身の闘争への連帯に、わが国労働者人民をひき入れていくためのたたかいである。

このようなねばり強い活動を通して、国際的なプロレタリア階級の利益に正面から立ち続ける国際主義政治闘争と、これを担うる国際主義プロレタリアートの建設を前進させようではないか。

国際主義プロレタリアートの実践的任務は、第三世界の反帝民族解放・社会主義革命への防衛・連帶戦を根幹的要とするものである。とりわけフィリピン革命への実際的連帶戦は、帝国主義との闘争において、また国際階級闘争の前進にとってきわめて重要な位置をもち続けている。

フィリピン革命運動は現在、米日帝国主義の経済的・政治的・軍事的支配の強化に耐えつつ、海外の人民、とりわけ米帝に代わるフィリピンへの支配的帝国主義として登場しつつある日帝足下のプロレタリア人民の連帶・援助を求め続けている。社会主義諸国からの連帶・援助が皆

無にひとしい今日、第三世界において頻発する人民の共産主義を求める決起が勝利していくためには、国外とりわけ帝國主義本国の労働者人民からの連帶と援助が決定的に不可欠であることを、フィリピンの革命運動は雄弁に物語っている。フィリピン革命の勝敗は、第三世界人民のたたかいの未来を占うものといつても過言ではない。フィリピンのたたかう人民は、物質的支援のみならず、何よりも彼らのたたかいがどれほど苦しくとも誇りをもってたたかいがれでいくために、階級としての熱い精神的連帯を求めている。彼らの革命を決して敗北させてはならない。われわれは、帝國主義への原則的実践的批判と、第三世界人民への支持・共感を水路として、苦闘するフィリピン革命への実際的連帶を強化していかなければならぬ。このたために次たたかいが重視されねばならない。

第一に、フィリピン共産党と新人民軍に連帯する大衆運動をぶ厚く組織することである。

フィリピンの公然・合法運動の領域における国際的連帶戦の必要性は一刻の猶予もない切迫したものとなりつつある。アキノ政権下で頻々

と起こる活動家殺しや組織弾圧は、マルコス時代をはるかに上回る規模と残酷さになっている。

にもかかわらず、ソ連や中国は政治的反撃を行

うどころか、むしろ日米帝に追随してアキノ政権を支持し、たたかうフィリピン人民に完全に背を向け続けている。この結果、フィリピンにおける言語を絶する「人権侵害」（それは實質的には抹殺のことである）や、帝國主義のあらゆる姑息で非道な政治的軍事的介入策動も、国際的にはほとんど批判されないという状況がもたらされている。このような現状は、フィリピンの階級的組織と活動家を防衛しうる合法的大衆運動の層を国内外を貫いてフィリピン共産党と新人民軍のまわりに幾重にも形成していくことを、緊要の課題として突き出している。

われわれがその創建を宣言しているアジアにおける共産主義党的国際協議会と、このもとに組織されるアジア人民の反帝国際統一戦線も、フィリピン革命の孤立と個別撃破に抵抗しうるフィリピン国内および国際連帶構造を、日本をはじめとしたアジア諸国人民の新たな政治的結合関係によって準備することに全力で寄与することをめざすものである。日帝本国の労働者人民は、もつとも犠牲をはらってこの組織化のために奮闘しなければならない。

第二に、解放区の維持・防衛・強化のための実際的支援・連帶戦を組織することである。革命を切望するフィリピンの貧農・労働者・被抑圧人民の希望としてある農村解放区の維持・防衛・強化への支援が、現在とくに重要な課題としてとりあげられなければならない。農村解放区の建設は、とりわけ貧困な地方では、長年にわたる帝國主義の植民地・新植民地主義支配下で徹底的に破壊され続けてきた貧農自身の生

存基盤を自力で奪還するたたかいを不可欠にしている。新人民軍を支え、革命への希望が再生産されるに足るだけの解放区経済をぎりぎり確保しようとする試行錯誤が続けられている。それは、貧農からの血のにじむようなカンパを中心としたまったく乏しい財源と、国軍との戦闘のあいまをぬつて銃を鍼に持ちかえる新人民軍兵士の犠牲的な生産活動によって支えられている。

だが、このような解放区は現在、帝國主義陣営のLIC戦略下で、膨大な資金と人力とを注ぎ込んだ反革命の側から深刻な攻勢にさらされ始めている。この攻勢とは、新人民軍が強固に組織されていくとくに貧困度の高い地方に、反革命の側からの開発プロジェクトを中心し、貧困を逆手にとて農民を新人民軍から離反させ、新人民軍を孤立させていこうとするものである。また米軍とCIAによって訓練された特殊チームをもって、人民に医療サービスを行ったり、人民のなかにスペイをもぐりこませ、国民党に協力する反共民兵を組織する作戦も行われている。これらの攻撃に太刀打ちできる準備をするための財政上・技術上の支援・連帶戦が強化されなくては、農村解放区の維持・防衛・強化は、独力ではぎりぎりの状態におい込められる。フィリピン革命の死活に関わる解放区をめぐる攻防を、プロレタリアートの側から支え抜くために、断固たる支援・連帶戦を緊急に確立しなければならない。

フィリピン革命の現段階が要求するこのようないつの実際的連帶戦に、わが国の人民を組織しなければならない。そのため、フィリピン人民の正当なる闘争をかくも厳しい困難のもとに置き続けるものが、日本をはじめとした帝國主義の新植民地主義支配に他ならないことをあらゆる機会に提起し、この批判を共有する人々に行動を呼びかけよう。そして、このような困難を一身に背負いながらも、フィリピン人民の自己解放闘争を深く共産主義革命へと前進・結合させ続け、国境をこえて全世界の労働者人民に連帶の要請を発し続けているフィリピン革命への深い共感と支持を、わが国の労働者人民のなかに広く深く組織していくための一歩を、九年を通じて切り開こうではないか。

労働運動の階級的な前進

八〇年代を通して、われわれは階級的労働運動派として自己の党派性を刻印してきた。今日においても、労働（組合）運動は、ひき続き日本階級闘争の再建のための大いな戦場であり続いている。しかし、気をつけなければならないのは、日帝の国際基軸帝國主義への成長と、第三世界における日帝の膨大な権益の存在は、日

本労働者人民の即時的な経済要求を自然成長のままにまかせれば、必ずやがてくる日帝の危機の時代には、第三世界人民をより一層搾取し収奪せよという要求に一挙に転化せざるをえないということである。いかなる意味でも、労働（組合）運動の即時的な要求に戦術方針とスローガンを付与することで、階級闘争の前進にいくばくかの貢献ができるというような、甘い期待を抱ける時代ではなくなった。階級闘争の前進にとって労働（組合）運動を意味ある戦場としていくためには、経済要求そのものを組織する過程で、目的意識的な資本主義・帝国主義の批判をもちこむと同時に、そのことを通じて経済闘争を不斷に政治闘争と結合させ、国际主義的な政治闘争にいざなっていくこと、これらを、共産主義者以外の誰にもなしえない目的意識的任務として正面から設定することを必要としている。

労働運動の帝国主義的再編が「連合」へと結実するなかで、圧倒的少数派になりつつも生き残ってきたわが国の左派労働組合は、このようないくつかの課題に正面から応え、日本帝国主義の危機の時代の階級闘争のための橋頭堡として生きのび、自己を強化していくことが問われ続けている。

労働者政治委員会の建設

国際主義政治闘争を通じて、われわれは労働運動・学生運動・諸民主主義戦線のなかに、国際主義プロレタリアートの独自の団結組織を建設していかなくてはならない。大衆運動の日々の浮沈によって、離合集散をくり返す政治過程的なあらゆるサークルや個別戦線とは区別して、この世界に起ころる諸事件を、唯物史観とプロレタリア的世界觀に立ってしっかりと見定め、国際的なプロレタリアートのたたかいの利益に立ちきつて行動していこうとする、先進的な労働者・学生・活動家の革命的団結が必要不可欠である。

全国労働者政治委員会は一九八三年に結成され、このよくなれた国際主義プロレタリアートたるうとする先進的労働者自身の政治組織として、同じく革命的学生運動を再建しようとすると先進的学生活動家たちとの、国際主義政治闘争の共闘をつみあげてきた。彼らの九一年のメインスローガンは「フィリピン革命勢力との連帯にかけて、国際主義政治闘争の大衆的前衛となれ!」である。そして、昨年秋の国連平和協力法案をめぐる激しい攻防の当初から、自衛隊海外派兵策動につき進む日本帝国主義の歴史的転換と眞正から対峙しうる階級闘争を再建することを掲げ、国際主義プロレタリアートの責務をかけて、日帝の自衛隊海外派兵策動粉碎、第三世界

のために、労働者大衆を国際主義政治運動へとままでいたゆまず組織していく指導を階級的労働運動再建の根幹にすえ続けることを決断しなければならない。

それは、日本国内における外国人労働者の「生きがため食わんがため」のたたかい『労働組合の希求がますます増大せざるをえず、この要求を原則的な日本労働運動重要な課題として組織し、彼ら彼女らを日本労働者人民の同権の仲間として迎えていくためのたたかいである。こうした新しい護民的任務は、先進的労働者に労働者大衆の排外意識との闘争の強化を要求している。帝国主義の危機に際して、帝国主義の超過利潤のおこぼれを保守しようとして、外国人労働者とりわけ被抑圧諸國からの労働者を排斥しようとする動きが必ず発生することはヨーロッパを見ても明らかである。また敵階級の利益追求もまた、新たな差別抑圧構造を生みだし強化せずにはおかしい。これとたたかい、外国人労働者を日本社会とその労働運動から閉め出そうとするあらゆる法的・社会的規制を突破していくことが要求されている。

人民との連帯のたたかいに決起してきた。そして、いったんは後景に退いたかにみえる日帝の海外派兵策動が、たとえどのような糾余曲折を経たとしても、必ず再登場してこざるをえない根柢をしっかりと踏まえ、日帝の権益擁護キャンペーント真向から対決し、日本階級闘争のかに第三世界人民への深い連帯を組織していく

同様の決意をもつすべての先進的労働者・学生・活動家たちが、自己の現在の所属する労働組合や諸戦線、諸組織の枠を大胆に踏みこえて、この決意のもとに共同の決起を組織すること、そしてこのよな決起を通じて、断固として先進的労働者・学生活動家の独自の団結と組織を創出することを呼びかける。

共産主義者同盟に結集を

スターリン主義の無残な敗北を口実として、わが国でも多くのエセ共産主義者がブルジョアジーと異口同音の「共産主義終焉論」を叫び続けてきた。彼らは、わが国階級闘争の否定的な現状に全面的に屈伏し、みせかけの斬新さを装いつつ、実際にはこれまで社共が占めてきた体制内左翼補完物の地位にすべりこんで安楽な夢をわかちあおうとしている。

これらエセ共産主義者どもがたどろくとしている帝国主義への屈伏の道と断固として決別し、われわれ共産主義者同盟（全国委）とともに、

全世界の革命的労働者人民と手をたずさえ、国際主義プロレタリアートの建設の大道を切り開いていくことを、すべての先進的労働者に呼びかける。スターリニズムの全面的破綻という歴史の試練である。共産主義によってしか止まることのできない人民の苦悩はすでに第三世界にみちあふれ、資本主義の激しい攻撃にさらされていく東欧諸国の人々も、またやがて必

要するものでない。そのために、くぐらねばならぬ残な事態は、共産主義運動が人民の真の希望として発展していくために、くぐらねばならぬ歴史の試練である。共産主義によってしか止まることのできない人民の苦悩はすでに第三世界にみちあふれ、資本主義の激しい攻撃にさらされていく東欧諸国の人々も、またやがて必ず資本主義との全面的闘争に立ち上がってくるだろう。そしてそこから、スターリニズムの誤謬との深刻な闘争の上にたった新たな共産主義運動が、人民の希望と結合して再び成長していくことは疑う余地はない。さらにこのよな共産主義運動の苦闘の先頭に立ちつつ、第三世界における人民の反帝民族解放闘争は社会主义革命へと成長発展し続いている。この前進は遠くない将来に、帝国主義（資本主義）の側からの激烈な介入を生みだすことは避けられない。帝王主義の激しい世界支配再編と反帝民族解放－社会主義革命鎮圧の攻勢との対決は、今日までスタークリン主義＝一国社会主義が投げ捨ててきた、真の国際主義に立脚した新たな国際共産主義運動の再建と深く結びついたものとしてしか実現しない。

このような時代に帝国主義本国で活動する共産主義者（党）は、共産主義の希望の復権という強烈な目的意識性に貫かれて、現実にわれわれの眼前に存在する労働者人民の政治的思想的前衛として立ち現れることを抜きにしては、どれだけ戦闘的であっても眞の意味で口先だけのものとならざるをえない。社会党は、帝国主義社民へと転落することによって、帝国主義ブルジョアジーの庇護のもとにに入ることを宣言し、日共は対米従属論にしがみつくことによって、日帝への免罪と帝国主義的排外主義への屈伏を深めている。かつて社共が労働者本隊を組織し、これへの左からの批判派たることで革命的左翼の存在意義がありえたという時代は完全に終焉している。わが共産主義者同盟（全国委）は、このよな「社共との暗黙の分業」を打破し、社共に代わる真に革命的な前衛党を建設する主体的条件を小なりといえども切り開いてきた。われわれはもてる労働運動・政治闘争の全陣形をあげて、以上のべてきたよう九年の政治的任務の前衛に立ちきり、次の歴史的会戦に向けて断固たる対戦を準備すべくたかいをおし進めていく決意である。

すべての先進的労働者・学生・活動家に呼びかける。共産主義者同盟（全国委）に結集せよ。そして以上の政治的任務を実現するために自己のもてる前衛性を徹底して發揮し、国際主義プロレタリアートの大軍を建設する前衛党をともに断固としてたたかいとろう！



アメリカ領事館前で抗議行動を行う運動90のメンバー(1月17日)

米大統領宛の抗議文

米大統領殿

抗議文

本日開始された米軍によるイラクへの攻撃を私達は怒りをもつて弾劾する。

米軍はただちにアラブから出でいくべきである。米軍のこの戦争によって、生命を奪われ苦しむのはひとえにアラブの働く人々である。

米国政府と米軍に、アラブの人々を殺す権利はない。米国の政府とブッシュ大統領は、残虐者として歴史にのこるだろう。米軍の軍事行動には何の正当性もない。米国政府は、アラブにおける石油権益

を防衛し、アラブにおける支配者としてふるまうために、今回の軍事行動をおこしている。

私達は、米軍のアラブからの即時撤退を求める。米軍は、ただちに攻撃を中止し、アラブから出ていけ。

私達は、今回の米軍の軍事行動を弾劾し、米軍の横暴を絶対に許さない。

以上、私達の抗議を表明する。

一九九一年一月一七日

国主義の侵略戦争に反対するフリーピンBAYANからの緊急メッセージ

ジがよせられた。

中東侵略 戦争勃発

運動90が緊急抗議行動

帝国主義の侵略を弾劾

大阪

一月一七日未明、開始された米軍の大規模な中東への軍事行動に反対する緊急抗議行動が、当日、全国各地で取り組まれた。

関西でも「ふたたびアジア人民をじゅうりんし、侵略し、支配しないための日本人民の運動・90」が、大阪の米領事館に向けての緊急抗議行動を行った。学生、労働者が約四〇名集まり、米領事館へ抗議文を提出。その後、街頭で「戦争反対！」を訴えるピラを配付し、午後六時から「関西共同行動」よびかけの米領事館抗議行動に合流した。参加者は全體で約三〇〇名にふくれあがり、集会と領事館抗議行動を夜まで行った。

二一日には、「運動・90主催による「アメリカの中東侵略戦争に反対し、平和を求める関西緊急集会」が大阪

府立労働センターに八〇名を集めて開催された。

運動・90の賛同人である丹羽弁護士が基調提起を行い、「米軍の中東侵略戦争に反対する大きなたたかいをアラブ人民のことはアラブ人民の手で！自衛隊派兵を実現しようとする自民党政府を許すな！」と訴えた。

京都の洛南労働組合連絡会議の代表幹事である小城氏は、「この戦争の本質は、帝国主義者によるアラブの石油資源を略奪するための侵略戦争だ。このことを徹底的にはっきりさせよう」と訴え、続いて、全日本建設運輸連帯労働組合関西生コン支部、大阪電通合同労働組合、自立労連タカラブネ労働組合関西支部・神戸支部、小原流本部職員労働組合

運動・90事務局は、「戦争反対！米軍への軍資金援助反対！自衛隊機派遣反対！」に全人民のたたかいを集めよう」と訴え、二月四日関西共同行動よびかけの関西での総行動や、職場・学園・地域での反戦のうねりをつくりあげることを提起した。

この緊急抗議集会には、運動・90の賛同人である勝間芳江氏、また帝

(兵庫)などが発言した。学生戦線からは京都大学一・一七実行委、竜谷大学、太谷大学平和委員会などが発言した。さらに、中東にヒト・モノ・カネを送るな・一・二・六集会美行委員会、カトリック正義と平和協議会、トマホーク阻止京都連絡会、関西共同行動などが発言した。関西共同行動は二月四日に関西での総行動を提起した。

帝の軍資金援助阻止・自衛隊中東派兵阻止・日本労働者人民の総決起を！われわれは、その先頭でたたかう。

全世界の人民の反帝闘争を前進させよう。米帝の中東侵略戦争反対！日

主義列強の中東侵略戦争は、帝国主義者の本性を余すことなく全世界にさらけだした。第二世界人民の反帝闘争と結合し、帝国主義に反対する



昨年の新天皇アキヒトの即位儀式にみられたように、日帝は天皇制強化のために歴史的な攻勢を開始した。

は「建国記念の日」が人民に強制され、天皇制と国家主義の強化がはかられようとしている。戦前の「紀元節」の復活をもくろんだ「建国記念の日」は、神武天皇によつて日本国が造られたという皇国史觀を正当化するものであり、この日、ここ数年恒例となつてゐる政府主催の祝賀行事の開催が強行されようとしている。

また「二月二三日から二五日」にかけて、皇太子の「立太子の礼」が予定されている。これは、新天皇アキヒトの即位儀式を受けて、次の皇位繼承者を正式に内外にうちだすための儀式である。ブルジョアジーは天皇即位儀式に続く「立太子の礼」を利用し、天皇制を人民のなかに広め浸透させることを

再び狙っている。こうした儀式を通してブルジョアジーは、天皇制の宗教的・政治的な権威を高め、同時にこれらの警備と称して、治安強化体制を抜本的に強化しようとしている。日帝国家権力は、天皇警備を口実にして、破防法の「改正」さえ検討し始め、革命的前衛党をはじめとしたあらゆる反体制的な組織と運動を壊滅しようとする攻撃を本格的にうちおろそうとしている。

われわれは、こうした天皇制政撃の強化に對して、いまこそ反撃の烽火をあげていかねばならない。現在、米帝による中東侵略戦争の勃発とともに、日本人民の政治的な憤激が高まっている。九〇億ドルといわれる巨額の「多国籍軍」

紀元節・立太子の札粉砕せよ

開かれた第二回のフィリピン・アメリカ協力会談——基地交渉はこう呼ばれているのだが——の結果、フィリピンにおける米軍基地の存続延長はほぼ確定となつた。米軍基地のフィリピンでの存続は、一九九一年九月一六日までとなつていていたものである。米大使館と米代表団スポーツマントン、スタンリー・マレンジャーは「第二回交渉は、前向きの方向で協調の精神を強めていく雰囲気のうちに終わった。アメリカとフィリピンは、相互の尊敬と平等に基づいた新しい関係を作り出していくであらう」と語った。

この交渉のフィリピン側の責任者である外務大臣ラウル・マングラプ

スは、一月一六日の記者会見で次のように語ったといわれる。「フィリピンは米軍基地の存続を一九九八年まで認める。その後も存続料次第では認める」。

以前から進歩的人々の間では現在の基地交渉は、米軍基地の撤去のためではなく、存続のための新条約のために行われるといったが、上記の発言はこの予測が正しかったことを裏付けている。

KMU自身も以前から米軍基地の将来をフィリピン政府が決定するというは、単なる言葉だけのことだ。フィリピン人民の願いをこまかすために言っているだけだと訴えてきたとして、政府に基地撤去の枠組みを基づいて交渉議題を設定すべきだ。

要求してきた。しかし、フィリピン政府は五月に予備交渉が始まる同時に、基地の存続延長として問題題をたてたようである。政府は、声明を発表し、フィリピンは「アメリカとの新たな関係」を作り上げ、基地の米軍とフィリピン国軍との共同使用をほのめかした。

アキノ大統領も第一次基地交渉に先立って声明を発表し、アメリカとの友情を望むと繰り返し協調したが、明らかになつたところでは、政府はこの意図を押し隠そうとしてきた。フィリピンはクラーク基地と四つの小さな軍事施設の主権を完全に確保するつもりだと語っているのである。しかし、この主権の確保と、いうことが何を意味するかは会談後

なるだらう」。声明はさらに続けて次のように言っている。「フィリピンが主権をもって基地を支配する」とは、単に一九九一年九月一七日までに基地問題についての決定を下すということを意味するにすぎない。運用に支配権をもつことは技術を要する施設を機能させていく責任がなければならない」。

今やフィリピンで広く知れわたっていることは、来年一月の第四回米基地交渉が行われる時には、新基地協定か政府役人のいふところの「安全保障条約」が、一九九一年九月一六日に失効する一九四七年の軍事基地協定にとって代わることになるだろうということである。

資料 米軍基地の存続延長は確実 MU通信(90年12月号)より

の公式の記者会見で、フィリピン側代表のスポーツマン、ラファエル・アルナンが行った次ののような声明で明らかである。「フィリピンはクラーク空軍基地の主権を完全に取り戻すことを行っているが、フィリピン人は未だその軍事施設を運用できない。フィリピン側としては、アメリカ側に、それらの技術を要する施設の運用を継続するように依頼することになるだろう」。声明はさらに続けて次のように言っている。「フィリピンが主権をもって基地を支配することは、単に一九九一年九月一七日までに基地問題についての決定を下すという意味するにすぎない。運用に支配権をもつことは技術を要する施設を機能させていく責任がなければならない」。

今やフィリピンで広く知れわたっていることは、来年一月の第四回米基地交渉が行われる時には、新基地協定が政府役人のいうところの「安全保障条約」が、一九九一年九月一六日に失効する一九四七年の軍事基地協定にとって代わることになるだろうということである。

先進的労働者・学生が、アジア・第三世界の革命運動への支援・連携全力で担い、自己を国際主義プロレタリアートへと打ち鍛えながら、天皇制・自国帝国主義と正面からたたかうこと抜きに、反天皇運動の前進はありえない。とくにいま、アジアで最大最強の革命運動であるフィリピン革命への連帯と日本帝国主義との闘争を掲げたアジア人民の国際共同闘争の先頭に立つことこそ重要である。ともに、国際主義を掲げ、反帝国際共同闘争を創出し、天皇制攻撃と根底からたたかいぬこう。

